

「なぜ、自分だけがこんなひどい目に遭うのか。悪いことは何もしていないのに」と嘆いている人がいます。しかし、物事は原因無くして起こることはありません。特に原因の一つ、親に対する感謝の基盤が脆弱だと、企業は倒産する可能性を含みます。

Y県で食品販売を営むM氏の体験です。

氏は、自分の体の中に父親の血が半分流れているのが嫌で嫌でたまりませんでした。「飲む・打つ・買う」の三拍子揃った父親でしたので、自分も同じ道を歩むのではなにかという恐怖心からでした。給与は家に入れず、すべて飲み代・賭け事に変貌。食事が気に入らなければお膳をひっくり返し、妻に対する一方的な暴力が続きました。

そんなある日、またしても女性問題が発覚。とうとう母親は離婚に踏み切り、兄(9歳)は父に、氏(3歳)は母親と共に生活することとなりました。

さらに氏の嫌悪感に追い討ちをかける出来事が半年後に起こりました。転々としていた飯場に兄を置き去りにして、父親が行方不明になったというのです。これらが起因となり、成長の過程で憎悪感さらには増大していったのです。

後年、M氏は起業し、十数年前に倫理法人会に入会。学びの中で「親を大切にせぬような子は、何一つ満足にはできない」という項目が胸に突き刺さりました。そして倫理実践と普及に没頭したのですが、解消の方途は見いだせませんでした。

ある日、研修を受けていた時、無性に父

親への敬の実践が 事業繁栄の元



え・牧えみこ

親に会ってみたい衝動にかられました。戸籍謄本から父親の所在を突き止めたのですが、すでに亡くなっていました。そこには義母が住んでいることが判り、墓参りを乞うと快諾してくれました。

初めて会った義母に、父親がどれだけ人様に迷惑をかけたかを聞くと、「お父さんは人に優しい良い人でした」と一言。地域の人のために喜んで働き、あなた方兄弟のことをよく心配していたというのです。これを聞いた瞬間、涙が止めどもなく溢れてきました。しかし、この時点では心の底から父親に感謝する段階には至りませんでした。半年後、事業が傾き、氏は民事再生法の申請を甘受。こうなつて初めて、本気で父親に助けを求めました。布団の中で悔し涙を流している、「Mよ！ 大丈夫、しっかりやれ」と父親の声が聞こえてきます。氏はこの言葉に一念発起し、再び仕事と倫理普及に挺身していきました。

その一年後、実母から電話があり、二十年前に亡くなった養父が氏に宛てたノートが見つかったというのです。この養父は躰が厳しかったため、M氏はいたたまれず家を飛び出した経緯がありました。

ノートには、金庫の番号と鍵が一個。開けてみると、中には旧札の一万円が五百枚。二人の父親にしっかりと見守られていることを実感した時、氏は感謝の念が深まりました。以来、仕事は大好転したのです。

両親の心の奥底にある「真情」を汲み取れなければ、真の事業繁栄はありません。